

開催地名	埼玉県深谷市
開催日時	令和7年11月18日(火) 15:00 ~ 16:30
開催場所	深谷市役所本庁舎 3階災害対策本部
語り部	倉堀 康(岩手県大槌町)
参加者	深谷市防災委員会委員及び部課長 40名
開催経緯	深谷市では毎年地域の各防災担当者向け講演を開催している。
内容	<p>ー東日本大震災の体験から今後の備えへー</p> <p>(1) 震災当日の状況</p> <p>2011年3月12日午前中に大槌町で親戚家族2名と避難所で合流した。津波、火災により町にあった避難所(城山体育館)付近まで炎上してきたことから別の避難所へ親戚家族2名と移動した。2か所目に避難した地域は中心市街から約15キロ離れた地域となる。津波被害のない地域であったことから親戚、知人宅へ避難(在宅避難)してきた地域、避難所となった施設も3か所あった。(役場支所・集会所・旧小学校体育館)</p> <p>この地域への避難により人口が通常の2~3倍の人であふれかえっていた。そこでの避難所の運営は、地域住民と役場(行政)職員数名と在宅避難者サポートと地域の人々の手を借りて行われていた。民生委員や自治体委員、行政連絡員などが協力し、被害の状況や在宅避難の世帯数の確認などを行っていた。</p> <p>(2) 避難所の運営について</p> <p>避難所の運営に携わろうと思ったのは、何かをしていた方が気が紛れるように感じたからだ。震災前から家族では災害時の避難場所を決めていたが、災害発生の翌日にその避難所へ行ったときには家族の姿はなかった。この震災により両親と兄、それに祖母と二人の叔母が犠牲となった。</p> <p>2か所目の避難場所に避難してきていた大半は家族連れであった。偶然会えた親戚がいたものの、自分は一人であることには変わらず、それはとても辛く自分が自分でいられない状態だった。そのような状態でメンタルを保つためにも、何かをしていたかったことから、避難所の運営に積極的に関わることにした。避難生活が長くなるにつれ、4月から役場(行政)機能を元通りに戻すために職員を避難所対応から通常業務に戻さざるを得なくなった。その際に役場の臨時職員として仕事をするようになった。避難所生活をしながら避難所運営を主に行っていた。</p>

	<p>その後、自宅に帰宅出来た人もいれば、避難所生活をしている人もいるなか、役場の人が抜け始め、避難所運営は人員不足となった。また男性だけでの運営では様々な不都合が生じ始めた。避難所には思春期の学生（小学高学年や中高生の女子）や若い女性の避難生活者もいたため、女性にも積極的に運営に参加してもらうことで女性ならではの視点で、細やかな援助ができるようにした。また、一般常識の範囲内であれば避難所生活者の意向を取り入れ、避難所生活をしている人たちそれぞれの得意分野を生かし、問題点や困難を共に解決していった。</p> <p>避難所の運営者（避難所生活者）と行政（災害対策本部）がきちんと連携できることがとても重要であると感じた。</p> <p>（3）長期間（3～4 か月以上）にわたる避難所生活の課題</p> <p>プライベートスペースが確保されていない中、小さなお子さんを連れている場合は双方がストレスになりがちである。また粉ミルクの確保には困難を極めた。日常生活を送る中で、洗濯物を干す場所がないなど、些細なことも普段のようには出来ず、慣れない環境での生活は大きなストレスになる。それが長期間続き、周りにあたる人も出てくる。</p> <p>そして、疲労やストレスで体調を崩す人も増えてくる、実際に感染症にかかった人が周囲に知らせなかったため、避難所全体に広まってしまったこともあった。</p> <p>また、運営に携わる人も被災者であるということ。その負担を少しでも減らすためにボランティアさんの活用も行った。</p>
開催地より	<p>大変な境遇の中での災害本部の立ち上げから、現在に至るまでのご経験を参考にし、自分達ができる取り組みから始めたいと思います。</p>

